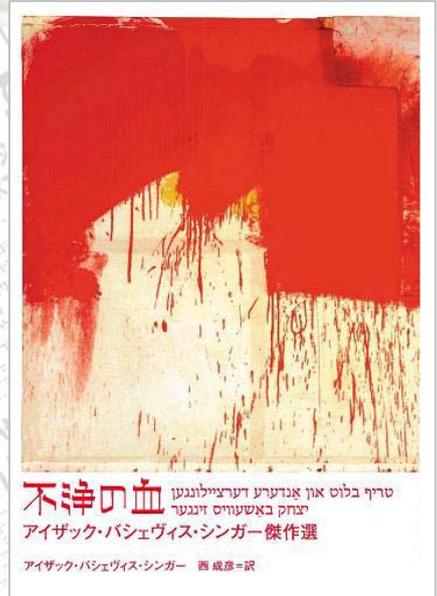


イディッシュ文学が遺したものの

「ホロコースト」の予感と余波(そして外傷)とともに 20 世紀文学の一角をになってきたイディッシュ文学を、いま研究することの意義を、アイザック・バシェヴィス・シンガー短篇集『不浄の血』の翻訳書(河出書房新社)刊行を契機に、あらためて考える場を設けたい。第二次世界大戦が引き裂いたヨーロッパ・ユダヤ人と在米ユダヤ人の苦悩の日々。イディッシュ文学が現代に遺した遺産とは何か？



司 会：西成彦（立命館大学）、細見和之（大阪府立大学）

研究発表：樋上千寿（京都造形芸術大学非常勤講師）

「シャガール作《アポリネール礼讃》の両性具有像について」
嶋志田聡子（荒川区役所職員）

「イディッシュ語の戦後——イスラエルの場合」
赤尾光春（オックスフォード大学聖アントニーカレッジ客員研究員）

「シオニストとしてのショレム・アレイヘム」
飛鳥井雅友（立命館大学非常勤講師）

「ハイム・ナフマン・ピアリークにおけるヘブライ語とイディッシュ語」
石光輝子（慶応義塾大学）

「イディッシュと多言語共生」
野村真理（金沢大学）

「近親憎悪？ ウィーンのイディッシュ」

参加無料
事前申込不要

コメント：徳永恂（神戸・ユダヤ文化研究会代表）、黒田晴之（松山大学）

日時：2013 年 3 月 24 日(日) 14:00-17:30

場所：立命館大学 衣笠キャンパス 末川記念会館 第 3 会議室

共 催：立命館大学国際言語文化研究所、2012 年度研究所重点研究プロジェクト「カタストロフィと正義」

お問合せ先：立命館大学国際言語文化研究所 TEL：075-465-8164 E-mail: genbun@st.ritsumei.ac.jp